2010年度
松本研究

都市眺望景観 × 視点高さ

論文 視点高さ変化に伴う都市眺望景観の特性と魅力に関する研究
～名古屋テレビ塔を対象として～

森嶋源太郎
石川翔一
杉本隆典

眺望景観に関する研究の背景

平成16年に景観法が施行されて以来、各地域で景観保全施策が次々と制定されており、景観への関心が高まってきている。その中でも俯瞰する眺望景観は、近年、都市の建築物の高層化により日常的なものになりつつあり、重要性を増している。

高層建築物には、展望室を設けたランドマークとなり得る施設が多く存在している。俯瞰して眺望行為を行うことで、地上から観るよりも広域を瞬時に視認することが出来、まるで地上とは別世界にいる鳥の視点を持ったような感覚になる。来訪者等は意識的・無意識的に眺望景観から都市形態を把握し、都市に対して様々な印象を持ち、どのような都市であるかをイメージする。そして他の景観要素を視認し、都市の位置関係を理解するのである。このような眺望景観の印象を明らかにすることで魅力的な都市形態を思案するに有用な知見を得ることができる。

研究の目的

本研究では視点高さに着目し、各々の視点高さの眺望景観の特性を素描景観による構図評価、印象評価、そして魅力度から把握することで、個性ある都市を形成していく上での資料を得ることを目的とする。ここでいう素描景観とは被験者が魅力に感じた眺望景観を制限時間内にスケッチしたものである。限られた時間内に素描された景観は、被験者が都市の構成要素の中から重要視しているものを意識的・無意識的に選定したものであり、被験者の感じた都市像が端的に表れる点で調査に有効であると考えられる。また、同一視点上で視点高さを変化させ、各評価の関係性を捉えることで、魅力ある景観づくりの方法をより細密に思考することが可能であり、本研究の果たす意義は大きいといえる。

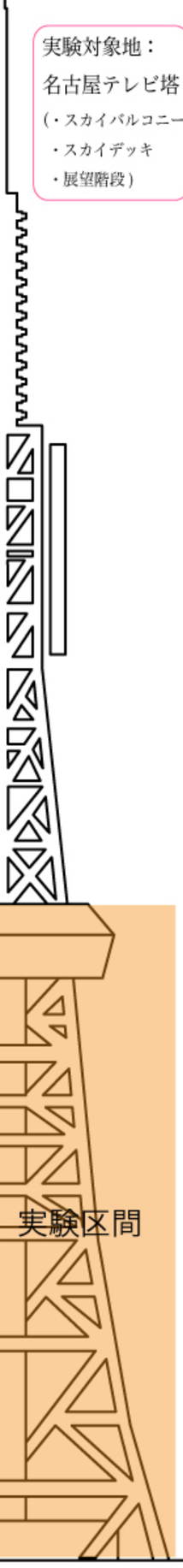
実験内容・結果

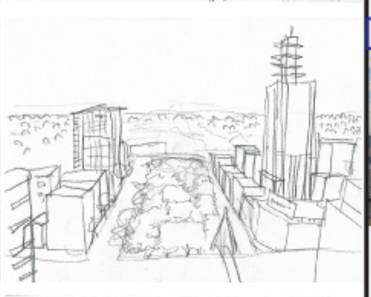
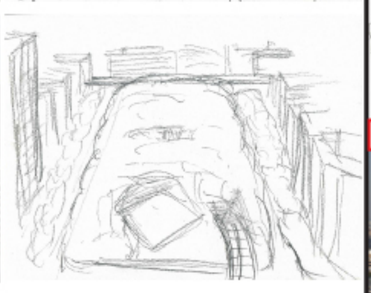
○実験対象地の選定　～同位置上での視点高さの変化～

＜選定条件＞
・公共性が高く多くの人に利用される場である。
・３６０度周囲を見渡すことができる
・複数の高さに周囲を眺望することのできる場が存在する。

○景観素描法

視点高さごとに景観を一通り眺めてから、最も魅力があると感じる景観を１箇所選んでもらい、スケッチブックに鉛筆で素描を行ってもらう。各時間は１箇所につき５分とする。次に素描した景観と同じ構図で撮影を行ってもらう。



視点高さ	写真	スケッチ
100m		
90m		
90m ～ 63m		
63m ～ 47m		
47m ～ 31m		

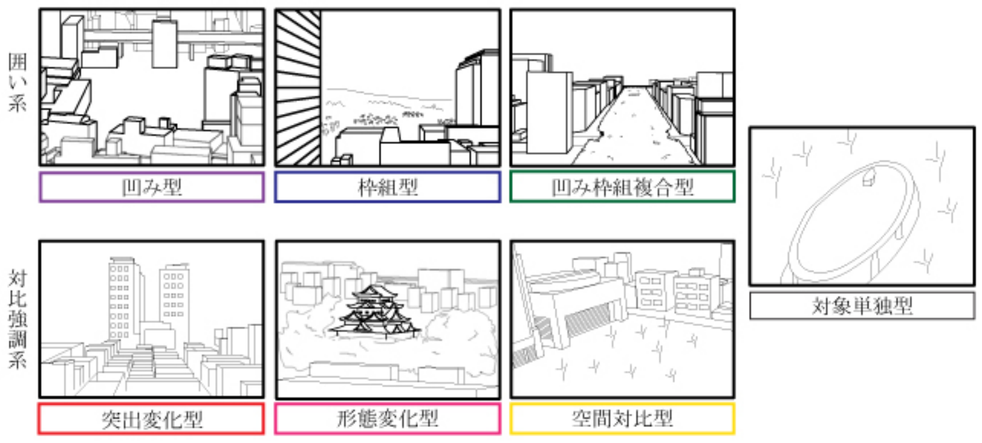
実験日時：2010年10月13・14日
被験者　：学生21名
（名古屋工業大学　建築系学生）

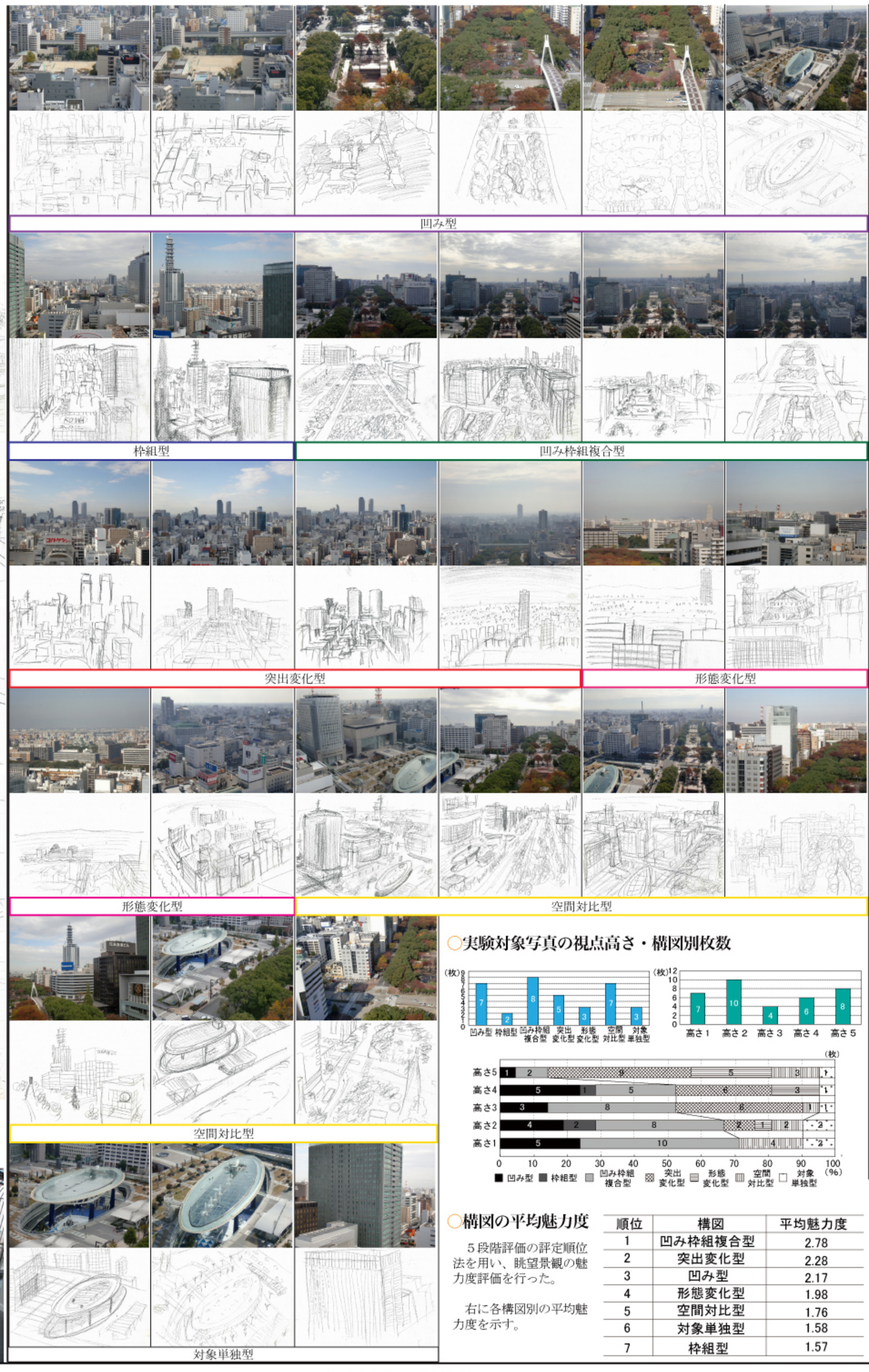
実験風景

○眺望景観の構図の分類

「どういった空間に着目しているのか？」によって実験にから得たスケッチの構図を分類した。

『凹み型』
：景観の中にある陥没した空間を捉えている構図
『枠組型』
：枠組の様に要素を配置し景観を描いている構図
『凹み枠組複合型』
：凹み型と枠組型が組み合わさった構図
『突出変化型』
：際立った高さの要素とその周辺環境との対比を捉えた構図
『空間対比型』
：特異な形態の要素とその周辺環境との対比を捉えた構図
『形態変化型』
：ボリュームのある部分と無い部分の対比を捉えた構図
『対象単独型』
：単独の要素がスケッチの大半を占めている構図





○実験対象写真の視点高さ・構図別枚数

○構図の平均魅力度

５段階評価の評定順位法を用い、眺望景観の魅力度評価を行った。

右に各構図別の平均魅力度を示す。

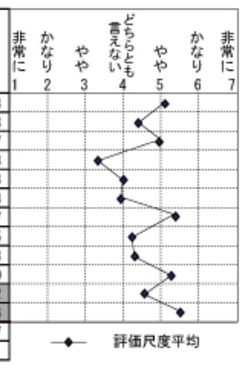
順位	構図	平均魅力度
1	凹み枠組複合型	2.78
2	突出変化型	2.28
3	凹み型	2.17
4	形態変化型	1.98
5	空間対比型	1.76
6	対象単独型	1.58
7	枠組型	1.57

眺望景観の印象評価

○眺望景観の評価傾向とその意味構造（因子分析）

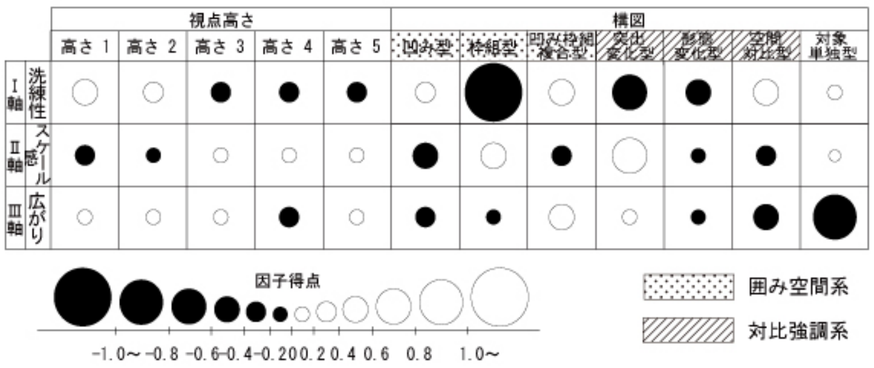
魅力ある景観の印象評価を考察する。また、魅力ある景観の評価傾向の意味構造を把握するためSD法評価を用いて因子分析（主因子法、ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ回転）を行った結果「洗練性」、「スケール感」、「広がり」の３因子軸が得られた。

評価尺度＼因子軸	Ⅰ軸 洗練性	Ⅱ軸 スケール感	Ⅲ軸 広がり
親しみのない－親しみのある	0.72	−0.26	0.08
くすんだ－鮮やかな	0.72	0.11	−0.18
美しくない－美しい	0.64	0.03	0.27
人工的な－自然な	0.61	−0.45	0.28
雑然とした－整然とした	0.42	−0.12	0.23
低い－高い	−0.46	0.73	0.03
小さい－大きい	0.18	0.55	0.17
平面的な－立体的な	−0.16	0.41	−0.15
静かな－賑やかな	−0.14	0.40	−0.08
一般的な－象徴的な	0.13	0.32	−0.20
連続性のない－連続性のある	0.24	−0.06	0.72
奥行きのない－奥行きのある	0.02	−0.04	0.46
固有値	2.35	1.58	1.07
寄与率	19.60	13.15	8.91

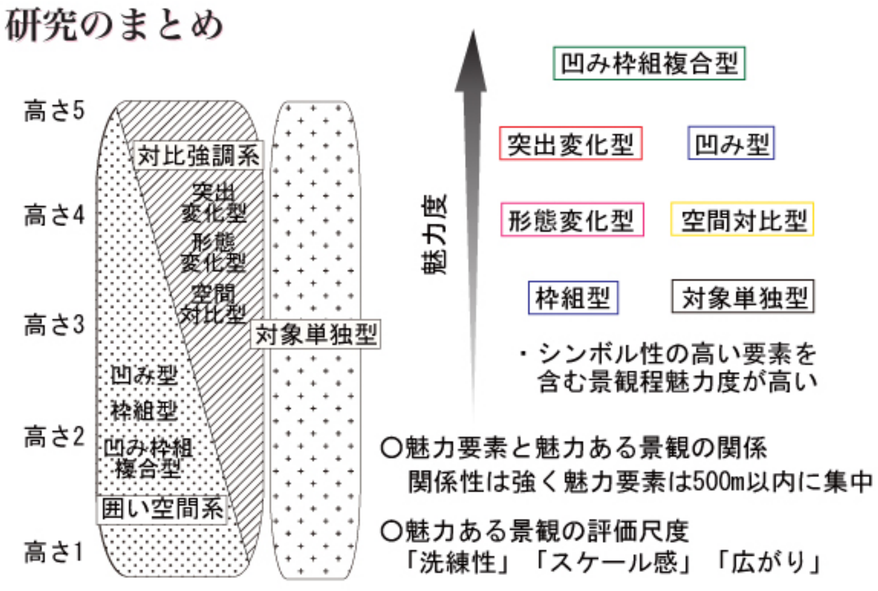


○眺望景観の印象と景観の魅力の関係（因子得点による分類）

次に魅力ある景観印象の因子分析によって得られた因子得点を用いて、視点高さ別、構図別に分類した。視点高さ別の傾向をみると高さ３から「洗練性」が負に転じている。これは人工的であると評価された景観が視点高さがあがると多くなることに起因していると考えられる。逆に「スケール感」は高さ３から正に転じる。構図別の傾向をみると『枠組型』の「洗練性」が負に大きい。また、『突出変化型』、『形態変化型』も因子得点が負である。



研究のまとめ



○魅力要素と魅力ある景観の関係
関係性は強く魅力要素は500m以内に集中

○魅力ある景観の評価尺度
「洗練性」「スケール感」「広がり」